

120

2022 SUMMER

ART PAPER

NAGOYA CITY ART MUSEUM NEWS

特集 失われた時への哀惜 1920年代のパリと3人の女

新収蔵作品紹介 写真集『共同制作 大須』 ARTIST 赤瀬川原平

アンケートより「布の庭にあそぶ 庄司達」 展覧会現在進行形「クマのプーさん」展

REVIEW 「開館40周年記念 宇田荻邨展」「サイトウミチヲジウム開館記念展 旅する絵画」

COLUMN 「トロヘギアを求めて」



田中保《ソリタ・ソラノの肖像》1923年 油彩・キャンヴァス 名古屋市美術館蔵

名古屋市美術館ニュース アートペーパー

発行 名古屋市美術館
名古屋市中区栄二丁目17番25号(芸術と科学の杜・白川公園内)
TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005
<https://art-museum.city.nagoya.jp/>

休館日 毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)、年末年始

開館時間 午前9時30分～午後5時、祝日を除く金曜日は午後8時まで
※入場は閉館の30分前まで

執筆 井口智子(I.)、勝田琴絵(KK)、久保田舞美(mm)、
清家三智(3)、竹葉丈(J.T.)、深谷克典(F)、
保崎裕徳(nori)、森本陽香(haru)

デザイン 岡田和奈佳

印刷 鬼頭印刷株式会社

発行日 2022年8月1日



Nagoya City Art Museum

特集 失われた時への哀惜 1920年代のパリと3人の女

1925年に創刊され、すでに百年近い歴史を誇る『ザ・ニュー Yorker』はアメリカを代表する雑誌の一つである。トルーマン・カポーティ、デイヴィッド・サリンジャー、ステイヴン・キングなど、その執筆者にはアメリカを代表する錚々たる作家たちの名前が連なるが、その一人にジャネット・フラナーという女性がいる。彼女は創刊から半年余りを経た1925年10月から、第二次大戦中の数年間を除き1975年まで、実に半世紀の長きにわたって「パリ便り」を同誌で発表している。このコラムは政治、経済、文化、さらにはファッション、料理、社交界など、パリで繰り広げられる様々な事象を、切れ味鋭い文章でアメリカの読者に紹介するものだが、創刊間もないアメリカの雑誌がこのようなコラムを設けるという事実が、いかに当時のアメリカ人にとってパリが高い関心の的であったかを示している。フラナーの記事はやがて評判を呼び、『ザ・ニュー Yorker』の目玉となり、1947年にはその功績によりレジョン・ドヌール勲章を授与されている。またその交友関係は実に幅広く、戦前のセーヌ左岸において最も影響力を持つ文化人の一人と目されていた。

1892年、アメリカ中部インディアナポリスに生まれた彼女は、大学卒業後、地元新聞に映画評などを寄稿しながら作家を目指していた。そして1921年にヨーロッパに渡り、各地を旅行した後、1922年からパリに定住し、当時この町に暮らしていた多くのアメリカ人、アーネスト・ヘミングウェイ、ガートルード・スタイン、スコット・フィッツジェラルドらと交友を深めながら、作家としての成功を夢見ていた。その彼女を撮影した1924年のものと推測される写真がある(図1)。憂いを帯びた表情で、虚空に視線をさまよわせるフラナーの上半身を捉えた、やや感傷的な趣の1枚なのだが、彼女の背後に女性像と思しき姿がぼんやり



図1 | ジャネット・フラナー、1924年撮影

と映っている。頭部がかるうじて認識できる程度の不鮮明なイメージなのだが、その特徴ある髪型でそれが誰か(何か)、すぐにわかる。名古屋市美術館が所蔵する絵画、田中保作《ソリタ・ソラノの肖像》(表紙絵)である。恐らくこの写真を撮影したのも、田中保その人であろう。絵画が制作されたのは、この写真が撮影された前年の1923年。撮影場所がどこかは不明だが、常識的に考えればフラナーの家(それはソラノの家でもある)、あるいは田中のアトリエということもあり得る。フラナーの顔にアンニュイな表情を与えている左上からの光は、画中のソリタ・ソラノを照らす光と同様で、これは形を変えた二重肖像と見えなくもない。撮影者は、明らかに背後の絵画とモデルとの関係を考慮して、この構図を決めシャッターを押している。

画中のモデル、ソリタ・ソラノは本名サラ・ウィルキンソン。1888年にニューヨーク州トロイに生まれている(図2)。高校卒業後、ニューヨークで舞台女優などを経験した後、作家に転じ、ニューヨークやボストンの新聞で劇評を担当した。ソリタ・ソラノの名前はこの頃から使用している。一方でナショナル・ジオグラフィック社とも契約を結び、不定期に記事を執筆していたが、1921年には同社の依頼により南欧から中東への取材旅行を行っている。この時旅行に同行したのがジャネット・フラナーであった。フラナーとソラノが出会ったのはニューヨークのグリニッチ・ヴィレッジで、1918年頃のことと言われている。当時ソラノはすでに夫と離別しており、フラナーは1918年にニューヨーク出身の画家と結婚していたが、それは故郷を脱出するための手段にすぎず、後に1926年、二人は円満に離婚している。男性への失望と、異国における作家としての新たな可能性の追求。それが二人を結び付け、パリでの新たな生活を共に送ることになり、その後半世紀近くわたって続く強いパートナーシップを築き上げることになった。1924年に撮影された写真は、その絆の証を示す一枚なのである。

フラナーとソラノがパリに到着する2年前の1920年にアメリカからやってきたのが、ソラノの肖像を描いた田中保とその妻ルイズ・カンである。埼玉県岩槻町(現・さいたま市)に1886年に生まれた田中は18歳の時アメリカに渡り、西海岸ワシントン州のシアトルに居を構え、様々な職業を転々としながら画家を目指した。妻のルイズ・カンは田中より7歳年長の1879年生まれ。父親はシアトルで判事を務めており、母親はドイツからの移民であった。二人が出会うのは1914年。ルイズは前年の1913年に、14年間に渡った最初の夫との結婚生活を解消し、シアトルの新聞に書評や地元の芸術家とのインタビュー記事を書く作家としての仕事を始めていた。一方の田中はすでにシアトルで個展を開き、また地元の学生に絵の指導をするなど、着々と画家としての歩みを進めていた。1914年9月、田中はシアトルの美術協会でキュビズムや未来派など、美術の最新動向に関する講演会を行ったが、たまたまこの講演を聞いたルイズは、その自由で進歩的な考えに深く共鳴し、その半年後に田中にインタビューを申し込んだ。二人はたちまち意気投合し、3年の交際を経て1917年11月に結婚している。夫が描き、妻が文章でその魅力を伝えるという二人三脚は、当初はうまく機能しているように見えたが、芸術至上主義的なその姿勢や先鋭的なアカデミズム批判は、保守的な美術愛好家の反発を買い、また田中の描いた裸婦像が猥褻であるとの議論を招くことにもなった。さらに、人種差別的な意図による中傷や妨害を受けることもあったようで、二人はシアトルにおける創作の限界を感じるようになり、新たな可能性を求めてパリに向かうこと



図2 | ソリタ・ソラノ、1923年撮影

になる。その直前に懇意の画商に送った手紙には、当時の田中の真情がにじみ出ている。「私の唯一の望みは画家になることであって、アメリカ人だろうが日本人だろうが、そんなことは関係ないのです」。こうして1920年5月末、二人はニューヨークから船に乗り、パリに向かった。

ヘミングウェイ没後に発表された、パリでの青春の日々を回顧した『移動祝祭日』の中に、友人の詩人エズラ・パウンドに触れた次のような一節がある。エズラ・パウンドのアトリエには「エズラの知り合いの日本の画家たちの絵もあった。日本の画家たちはみな貴族の出で、髪を長くのばしていた」。この「日本の画家たち」の一人は、ロンドンでエズラ・パウンドと親交していた久米民十郎と考えられており、久米はパリのパウンドのアトリエで1922年に個展を開催している。ヘミングウェイが見た「日本の画家たちの絵」の中に、果たして田中の絵が含まれていたかどうかは不明だが、ルイズは日本通で知られるパウンドに、パリでの田中の個展開催の援助を求める手紙を書いている。結果は不首尾に終わったが、代わりにパウンドは、同じく日本通で知られるジェイムズ・ジョイスをルイズに紹介している。当時のパリには、イギリスやアメリカ出身の作家が数多く生活しており、緊密なコミュニティーを形成していた。恐らくこの交流の中からルイズとジャンネット・フラナーの関係が生まれ、それがフラナーのパートナーであるソリタ・ソラノをモデルにした肖像の制作へとつながっていったに違いない。パリでの新しい生活は、田中の創作意欲を強く刺激し、いくつものサロンへの出品や個展の開催へ向かわせたが、それは必ずしも作品の販売とはつながらず、経済的には苦しい日々を余儀なくされた。パリでの初期の作品には、裸婦と並んで数多くの人物画があり、現時点ではモデルは不明だが、ほとんどは肖像画として制作されたものと推測される。いつの時代でも、肖像画は画家にとって最も手堅く収入を得られる分野であり、パリのアメリカ人社会におけるルイズの人脈が、それらを可能にしたのであろう。

しかし、この肖像画という分野について、シアトル時代の新聞記事の中で田中是否定的な意見を述べている。彼は肖像画を描くということを考えただけでぞっとするし、肖像画などというものは第一級的美術品とは言えないと否定する。そのうえで、肖像画が意味あるものになるとしたら、それはモデルの内面、人間性に迫ることができた時だと言う。つまり彼は、表面的な姿形を巧みに写し取っただけの肖像画には何の価値もなく、画家がモデルの内面を表現できたときに初めてそれは美術品としての意義を見出すと言いたいのだろう。しかも、その内面は、モデルに関する詳しい情報を知ることによってではなく、初対面の印象、いわば直観によってしか得られないと田中は考える。芸術とはすべからず精神活動の表明であるとする、この画家の信念に則った肖像画論といえるが、であれば鑑賞者がこの絵から受ける印象は、画家その人がモデルを前にして受け止めた直観を記録したものということになる。ソリタ・ソラノの画面に漂う憂愁、その絵を背景に撮影されたジャンネット・フラナーの物憂げな表情。人は無意識のうちに相手の中に自らの分身を探しだすというが、モデルたちの中に見つけた憂鬱は、画家自らが抱えていたものに違いなく、だからこそ共鳴して作品の中に記録されたのである。希望に充ちて訪れた異国の空の下で、彼らは何を思い悩んでいたのだろう。

1920年代のパリは「レザネ・フォル(狂騒の時代)」と呼ばれ、世界中から集結した綺羅星のごとき才能が、目もくらむほどの輝きを放った時代だが、残された作品はどこか憂いと影を湛えている。いつの時代も芸術家は、時代の背後にひそむものを敏感に察知し、知らず知らずのうちにそれを作品の中に記録するというが、それを象徴するような作品がある。マリー・ローランサン《アポリネールの娘》(図3)である。

ドイツ人の男性と結婚したために、第一次大戦中のスペインでの亡命生活を余儀なくされたローランサンがパリに戻ってきたのは終戦から3年後の1921年。すぐにボール・ローザンバール画廊での個展を成功させると、やがて肖像画家としての地位を確立し、パリの社交界の人々の華麗な姿を次々と画面の中に記録していく。しかし、透明感のある淡い色彩によって夢見るような世界を描き出しながら、そこには甘いだけではない、かすかな痛みのような感覚がある。ヴァトーやシャルダンに通じるような、人間がどうしようもなく抱える哀しみが、薄

い膜のように作品を覆っているのである。

画面左上にはアンドレ・サルモンによる献辞が次のように綴られている。Guillaume Apollinaire des belles années, Bel née hors du temps, Voici ta fille aînée. (素晴らしき日々を生きたギヨーム・アポリネール 時代を超えた美しき存在 ここに君の長女がいる)。恐らく「アポリネールの娘」という題名もサルモンが付けたものだろう。この作品は1924年に描かれたと推定されているが、スペイン風邪でアポリネールが没してからすでに6年が過ぎたこの時期に、なぜアポリネールを追慕するような作品をローランサンが描き、そこにサルモンが献辞を捧げたのかは不明だ。しかし、寂しげな少女の顔には間違いなく若き日の詩人の面影が重ねられている。つまり、画家と詩人がもし別れを迎えていなければ、今頃はここに描かれているような娘が二人の間に存在したはず、という過去への強い哀惜の思いがこの作品を生み出したのである。実生活では画家として絶頂の日々を送りながら、失った恋の痛みを忘れることができず、せめて作品の中でその思いを遂げようとするローランサンの哀しい願いが画面を覆っている。

「失われた世代」とは、ガートルード・スタインがヘミングウェイに投げかけた言葉として知られるが、世界大戦という未曾有の悲劇を経験し、旧来の価値観や道徳を失い、寄る辺なくさまよう1920年代を生きる若者たちを指すという。それは若者だけでなく、この時代を生きる全ての人々が抱えていた深い喪失感を表した言葉であり、取り戻すことができない過去への悔恨と淡い郷愁がこの言葉を満たしている。《ソリタ・ソラノの肖像》と《アポリネールの娘》に漂う憂愁と倦怠。そこには個人の思いとともに、華やかで享乐的に見える時代の裏に潜む、失われた時への哀惜がまぎれもなく刻印されている。(F)

* 本稿執筆にあたり Denise B. Tanaka、Jacqueline Gojard 両氏に様々なご教示をいただきました。記してお礼申し上げます。



図3 | マリー・ローランサン《アポリネールの娘》1924年頃 名古屋美術館蔵



で世界が変わってしまった」という。

合宿に於いて「写真を読む」ことを初めて知った石原は、部長を務めていた同校写真部による共同制作を企画、撮影地に選ばれたのは、市内中区若宮大通りの南、大須であった。

古くから観音信仰により寺町として、又歓楽街として繁栄した大須には明治30年、17もの写真館が軒を連ね、休みの日ともなると行楽客が記念撮影に出掛けた、言わば名古屋の写真の“原点”とも言える場所であった。戦後復興のなかで「100メートル道路」が完成すると、大須は名古屋の中心・栄から“分断”され、家具街、仏壇仏具街として独自の雰囲気を醸し出すことになる。写真部員10人による取材は、1968(昭和43)年12月から四ヶ月に亘って行われた。「共同制作」の成果として100点近くの作品が寄せられ、翌1969(昭和44)年4月には24点からなる写真集にまとめられた。

線香の煙がたなびく中で一心に拝む老女の後姿とそれとは対照的に、屋外に設置された石造の菩薩像の肩越しには隣の民家の洗濯物が風に揺らぐ。商店街の“ヴァナキュラー”

なサンタクロースの看板は、アスファルトに描かれた子どものグラフィックに並置される。その他、門前の“我楽多”を寄せ集めた露店での店主と客のやりとりや、バーが軒を連ねる路地裏など、何処か“場末”の雰囲気を色濃く漂わせる街を、少年たちは臆することなく対象に迫り、また遠／近を意識して、スナップ・ショットで撮影していく。

大須界隈に取材し、現実の社会に人々の生活を見出した石原と杉浦はその後、写真撮影にのめり込み、同年「世界反戦デー」に当たる10月21日に名古屋・栄の広小路通りで行われたデモに取材することになる。学生と機動隊の衝突を撮影した一群の写真には、紛れもなく“時代の体温”とともに時代の中に生きる自身の姿までもが反映、焼き付けられた。(J.T.)



写真集「共同制作 大須」名古屋電気工業高校写真部(1969年4月) 名古屋市美術館蔵

ARTIST

赤瀬川原平 Akasegawa Genpei / 1937-2014



赤瀬川原平《大日本零円札と両替された現金の瓶詰》1968年 名古屋市美術館蔵

赤瀬川原平は、画家、イラストレーター、小説家、写真家など、いくつもの顔を持つ芸術家として知られています。横浜に生まれ、少年時代を大分で過ごし、名古屋の旭丘高校美術科を卒業後、東京で活動しました。その制作の特徴は、日常の中に芸術を持ち込むとともに、芸術の中に日常を取り込み、日常と芸術の境目を問い直した点にあると言えるでしょう。

《復讐の形態学(殺す前に相手をよく見る)》(1963年、名古屋市美術館蔵)は、当時の千円札を約100倍の面積へと拡大描写した作品で、「拡大千円札」とも呼ばれます。幼少期に貧困を味わった赤瀬川にとって、千円札はもっとも出会いたい相手でありながら敵でもあり、「復讐」の対象でした。彼は社会におけるお金の仕組みを表現しようと、考え、まずはお金の正体を知るべく、日常的には

じっくり見ることのない紙幣をよく観察し忠実に描き写すことから始めたのです。

これ以降、赤瀬川にとって「千円札」は重要なモチーフとなります。例えば、千円札を原寸大に印刷し、その裏面に自らの個展の案内を記載して、現金書留封筒で関係者へ送付しています。また、印刷・複製した「千円札」でかばんや金槌などの日用品を梱包し、本来の機能を失わせたオブジェ作品も制作しました。しかしこれらの行動が警察に知られ、1965年に「通貨及証券模造取締法」違反の疑いで起訴されます。この裁判で最終的に赤瀬川は敗訴するわけですが、法廷には様々なジャンルの作品が持ち込まれ、また当時を代表する芸術家や批評家たちが証言を行い、現代美術の歴史と意義を問い直す議論の場となりました。

当館では2019年度に、この「模型千円札事

件」の関連資料273点をご寄贈いただきました。公式の裁判記録や証言記録、裁判で押収された証拠品、当時の新聞記事、法廷の様子をうつした記録写真、「千円札事件懇談会」が製作した印刷物などから構成されています。2021年度の当館常設展「名品コレクションⅡ」(会期2021年12月11日-2022年4月10日)では、この一部を展示しました。

図版の作品は、赤瀬川が裁判中の1967年に制作した「大日本零円札」です。「零円札」は紙幣にしてはサイズがあまりに大きく、偽物ではない、絶対に法律に抵触することのない「順法絵画」として制作されました。「零円札」は日本国通貨300円と交換できると宣言され、ここでは実際の両替で使われた現金と封筒が瓶に収められています。(KK)

アンケートより

布の庭にあそぶ 庄司達

2022年4月29日(金・祝)ー6月26日(日)

庄司達《Navigation Level No.5》2022年 作家蔵



愛知県を拠点に活動し、布による作品で知られる庄司達の個展として開催した本展では、〈Navigation〉シリーズなど、大型インスタレーションを多数展示しました。鑑賞者が作品の中に入り、空間を体感できる作品が多く、アンケートからは、見るだけでなく体験する楽しさを存分に味わっていただけたことがうかがえました。

- たくさんの糸を見ていると奥行きを感じなくなったり、現実であって現実ではない感覚。(名古屋市、50歳代)
- 作品内をくぐれて子どもの頃の思い出がよみがえり、キラキラとした懐かしさを覚えました。(名古屋市、20歳代)
- 空間内に自分が入ることによって、様々な視点から作品の柔らかさや光を楽しむことができて素晴らしいかったです。(愛知県、20歳代)
- 2階の展示は一つひとつを見ると難しく感じたが、俯瞰すると日本庭園のようだと感じた。(東京都、20歳代)
- そこにいる人や空間、空気の動きが感じられて楽しかった。ゲルやテント、平安時代の御簾に区

切られて生活する人は、きっと違った感想を抱くのだろうと思った。(京都府、高大学生)

- これから日常の中にある、自分が楽しいと思う空間を見つけてみたいと思いました。(福井県、20歳代)
- 他の人が隣を通ったりすると、空気の流れで布がたわみ、揺れ動くさまが動的、詩的でよかった。(愛知県、30歳代)
- 布の間をくぐりながら、布が優しくて驚いた。(愛知県、40歳代)
- 空間に糸や布でメリハリをつけることで、認識がこんなにも変化するなんて驚きました。人間にも糸や布のような要素があると思うと、空間づくりは面白いと思いました。(名古屋市、20歳代)
- 今回の作品たちは、あの世とこの世を結んでいるようで、Cloth Behindは天国から産道を通して自分が新たに生まれるような感覚があった。(愛知県、60歳代)
- 現代社会はいかに人工物に囲まれているか、何か目的のあるものばかりに囲まれている寂しさを思索しました。(岐阜県、20歳代)

○作品に吸い込まれる気がして、日々のストレスから解放された。(名古屋市、20歳代)

同じ作品でも、多様な感じ方、見方があって、それぞれに想像をふくらませながら鑑賞いただけたようです。

○外国人の私には、説明のVideoが最後にあると、その前に見たものがはっきり分からないままになっていました。最初のところにも、動画などの説明があると、助かります。(岐阜県、20歳代)

外国人の方にも分かりやすいよう、英文併記をスタンダードにするなど、美術館には幅広い来館者に対する配慮が求められます。誰もが理解しやすい展示になっているか、今一度見直していきたいと思います。(haru)

展覧会現在進行形

「クマのプーさん」展

2022年10月8日(土)ー11月27日(日)



クマのプーは、少年クリストファー・ロビンと仲よしのクマのぬいぐるみです。はちみつが大好きで、よく自分で歌をつくり口ずさんでいます。プーにはコブタ、イーヨー(ロバ)、カンガとルー(カンガルーの母子)といった仲間たちがいます。A. A. ミルンが子ども向けに書いた、彼らが百町森(百エーカーの森)を舞台に活躍する物語は、1920年代にイギリス、アメリカで出版され、E. H. シェパードが描いた挿絵とともに多くの子どもたちの心をつかみました。

「クマのプーさん」は、最も知られている『クマのプーさん』(原書Winnie-the-Pooh、1926年)と『プー横丁にたった家』(原書The House at Pooh Corner、1928年)の2冊の物語と『クリストファー・ロビンのうた』(原書When We Were Very Young、1924年)と『クマのプーさんとぼく』(原書Now We Are Six、1927年)の詩集2冊からなるシリーズです。日本では、1940年に石井桃子の翻訳による『熊のプーさん』が岩波書店から刊行され、その後、

『プー横丁にたった家』や詩集も翻訳され、絵本も刊行されるなど長く読み継がれています。

これらプーの物語とともに愛され続けているのが、シェパードが描いた挿絵です。本展では、アメリカのダットン社のシリーズ新装版が刊行されるにあたり、1950ー60年代にシェパードが新たに描いた貴重な原画約100点を展示します。これらのカラーを含む原画は、岩波書店から刊行されている『クマのプーさん プー横丁にたった家』や『絵本クマのプーさん』の表紙や口絵に使われているものです。目にしたことがある、あるいは懐かしいと感じる方も多くいらっしゃると思います。

このたびの展示では、シェパードの原画とミルンのことばを核にして、皆様に原画を観るだけでなく、クマのプーさんの世界を体感し、じっくりと味わっていただけるような展示を目指して現在準備を進めています。子どもからシニアまで幅広い世代の皆様に楽しんでいただける内容になると思います。どうぞ、今年の秋はプーと仲間たちに会いに美術館にお越しください。お待ちしております。(I.)

開館40周年記念 宇田荻邨展

2022年4月23日(土)ー6月19日(日) 三重県立美術館

三重県松阪市生まれの日本画家、宇田荻邨(1896-1980)の回顧展。もともとは作者の没後40年にあたる2020年春に開催を予定していたものの、新型コロナウイルス感染症の拡大により開幕直前で中止に。仕切り直しで今年、三重県立美術館の開館40周年記念として開催され、地元ゆかりの重要作家を節目に顕彰する意義深い企画展となった。2年前とほぼ変わらない内容で開幕に至った学芸員はじめ主催者各位のご尽力と、所蔵者のご厚意に、観衆の一人として感謝申し上げたい。

ポスターや図録の表紙に用いられた《飛香舎(藤壺)》でも顕著のように、荻邨といえば端正な構図と装飾的で緻密な細部の描き込みが特長であり、華やかでありながら柔和で品のある色の取り合わせが魅力だ。本展ではそうした見所を十分に堪能できるとともに、昭和3年(1928)や昭和16年(1941)の《林泉》といった作品の出陳のおかげで、京都画壇の先輩格である土田麦僊の様式美や村上華岳の線描を研究していたであろう様子も、作品から直接窺い知ることができた。

しかし個人的に、この機会にぜひ見ておきたかったのは、祇園の茶屋を描いた《夜の力》や島原の芸妓を



宇田荻邨《太夫》大正9年(1920) 京都市美術館蔵

描いた《太夫》など、荻邨が大正6年(1917)に京都市立絵画専門学校別科を卒業してから数年間の作品だった。当時の美術批評家・豊田豊は、「祇園、島原に於ける耽溺生活を其藝術表現に於いて、最も直接に具體的に謳ひ出せるは彼宇田荻邨なりき。『一力』『大光』『南座前』等の彼の藝術方向は、此享樂の都の享樂街の郷土美を謳ひ嘆ける抒情詩にあらずして何ぞや」(『新興美人畫作家論』『美之國』昭和2年(1927)9月号)と評している。「明るく爽やかな色彩で、現実の京都以上に美しいといわれる格調高い京洛の四季を描き出し」(プレスリリース)たとされる荻邨が、若かりし頃は赤と黒、明と暗の強いコントラストでもって、まるで逆の一面を描いていたというのがとても興味深い。会場を見渡し、荻邨の画歴を俯瞰して見てみれば、この一時期のみがいかに異質であったのか一目瞭然だった。(nori)

サイトウミュージアム開館記念展 旅する絵画

2022年5月8日(日)ー8月21日(日) サイトウミュージアム

この春、国学者・本居宣長や日本画家・宇田荻邨にもゆかりの深い三重県松阪市魚町に新しい美術館が開館した。趣ある商店や民家が続く通り沿いに現れる真白な建物。開館記念展には、精神科医であり館長の斎藤洋一氏の個人コレクションから近現代の風景画が並ぶ。緩和のきざしが見え始めたとはいえ、いまだ海外旅行や遠出の機会が限られる中、国内外を旅した画家たちの作品を介して各地の風土を感じようとするのはごく自然な心の在り様だろう。名古屋市美術館の常設展をご存じの方は鬼頭鍋三郎、田中保、山本鼎などとの思わぬ邂逅に心躍るかもしれない。

観覧しながら作品状態の良さに敬服した。油彩の画面保護のために施すニスを経年によって黄変し、埃を引き寄せ、作品鑑賞を妨げる要因にもなりうるが、適切な処置によって油彩本来の美しい発色を見せている。風景画は現地で描かれたもの、スケッチ等をもとに後年制作されたものが混在して展示されているが、各地の気候や緯度の違いによって色の見え方は大きく変わる。画家の目が感受し、その景色を留めるために選び取った色を尊重しようと細心の注意を払っていることが窺われた。

作品情報の提供にもこだわりが見える。作品キャプション右上にある二次元バーコードをスマートフォンな

どの端末で読み取ると、Googleストリートビューに繋がり、作品に描かれた風景と概ね同じ場所の現在の様子とを比較することができる。こうした最新技術を取り入れる一方、解説文中に作家情報は氏名と生没年以外ほとんどなく、作品を何度も見返し確かめたくなるような事柄を意識して執筆、提供している。来館者に目の前の作品一つ一つとよく向き合ってほしい、それを促すのに適切な情報とは果たしてどのようなものか、熟考を重ねた結果であろうことが想像された。

規模も特色も活動内容もさまざまな美術館が全国に数多ある中、地に足をつけ、確かめるようにゆっくりと歩みはじめたこの館を今後も見守りたい。(3)



会場風景 写真提供: サイトウミュージアム

コロンビアを求めて

現在開幕中の「ボテロ展 ふくよかな魔法」。学芸員2年目の私が、美術館で初めて担当した、ドキドキの展覧会です。

さて、本展覧会の主役であるフェルナンド・ボテロは、南米コロンビアの生まれ。担当として色々と調べているうちに、「近くのコロンビア」が気になるようになってしまいました。黄・青・赤の配色がやけに目に付いたり、コロンビア料理やコロンビアと名の付くお店を探してみたり、コロンビアはカカオがおいしいと聞きつければ、スーパーや専門店にあるチョコレートのカカオ豆生産国をチェックしてみたり…。

そんな中でも、コロンビアといえば、やはりコーヒーを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。黄青赤の国に頭が支配された私、カフェで注文するコーヒーの豆は言わずもがな。調べてみると、コロンビアは、コーヒー豆の生産量世界第3位。更に、アンデス山脈周辺の生産地域は、ユネスコ世界文化遺産に登録されているとのこと。展覧会担当になり調べようとしなければ、知り得なかったことばかりです。

ボテロ自身、幼いころの記憶やラテンアメリカの世界を主要なテーマとして、作品を制作しており、当館のコレクションの柱であるメキシコ・ルネサンスの壁画家たちの作品も見えています。「アートが普遍的であるためには、まずローカルでなければならぬ」作家のこの言葉は、自らのルーツへの関心をよく示したものと言えるでしょう。作家や作品と短絡的につなげることはやぶさかですが、ボテロに関して言えば、生まれ育った当時の国の風土や環境を考えてみるのも1つの観点だと思います。

皆さんも、美術館でボテロの世界を体感した後には、コロンビアコーヒーで一息ついてみてはいかがでしょうか？ ちなみに、コロンビア豆は苦味と酸味のバランスが良く、地域によっても風味が異なるのだとか。「違いの分かる女」になるのはまだまだ先のよう…。(mm)



コロンビアの代表料理、アヒアコ“風”を自作
本場の味への思いがより募る結果に